

第十六回 南のシナリオ大賞受賞作品

「ちりんとくん」

登場人物

松田	松田	松田	林	林	隣人
健太	健太	雄 ^{ゆう} 大 ^{だい}	偉男	恵津子	
(34)	(6)	(75)	(67)	(52)	
「招福飯店」コック	健太の甥	「招福飯店」店主	店主の妻	松田の隣室の女	

「ちりんとくん」あらすじ

「招福飯店」のコック、松田健太（34）は店主からラブレターが来た、と手紙を渡される。が、それは行方不明の姉からで、甥・松田雄大（6）が待つ場所のみが書いてあった。初めて会う甥は博多訛りっぽい言葉を話し、人懐っこい。しかし、松田は確執ある姉との関わりを嫌い、子供を一刻も早く警察へ連れて行き、手を切ることしか考えない。

その晩、自宅に泊めた雄大が風鈴を外に出して隣人が怒鳴り込んできた。雄大は大人の怒声に怯えるが、「ちりんとくん」と名付けた風鈴を抱くと何もなかったように眠る。

翌朝、雄大は風鈴と共に姿を消していた。松田はその時やっと、自分の言葉で必死に話しかけていた幼い雄大の心の内側に気が付く。帰宅した雄大と向き合う努力を始める松田。冷蔵庫を開けると、そこにはいつの間にか雄大の「ちりんとくん」が吊るされ、居場所をみつけたように揺れていた。（おわり）

野菜を刻み、熱い鍋で炒める。

松田 M「SNS を始めたなら、古くて小さな『招福飯店』にもイイネが来た。店長は厨房で鍋を振る俺の写真までアップしたようだ」

松田 「松田 戻りました。店長、交代します」

林 「あ、松田 健太様へ、ラブレターね」

恵津子「ネットを見たって。少し前に女性が」

松田 「え、手紙？　なんで俺なんかに――」

林 「きつとネットでお嫁さん見つかるよ」

松田 「絶対あり得ませんって（照れる）」

手紙を開く。

松田 「えっと、ネット見たよ、ご活躍だね。

コインランドリーに息子がいます。（怖い

声）奥さん、コインランドリーって？」

恵津子「出て左、すぐの角を右、三軒目」

松田 「あの疫病神がっ」

飛び出していく。

林 「何か変だね？」

恵津子 「手紙、見ちゃおう。コインランドリーに息子がいます。松田雄大^{ゆうだい}六歳、健太の甥だよ、仲良くね、だって、お父さん！」

林 「アイヤ、大変だ！」

大型洗濯機が回っている。

松田 「（奥へ）姉貴、いるのか」

松田 M 「巨大な洗濯機が並ぶその隅で黒い影が動き、水色のTシャツ、色黒な顔に、への字口の男の子がゆっくり出て来た」

雄大 「おじさんが、ケンタなの？」

松田 「ケンタ？ ああ、松田健太だけど」

雄大 「ケンタ、なんしよう！ （泣く）」

松田 M 「豪快に泣き出した博多訛りっぽい男の子。彼が姉の息子、雄大だった」

炒飯を作っている。

雄大 「ケンタ、なんしようと？」

松田 「え、おまえの炒飯作ってるんだよ」

雄大 「炒飯好き。あ、野菜のスープは要らんよ。おばあちゃん、なんしようと？」

恵津子 「ダメダメ、小さい子は厨房をうろつくんじゃないよ。火があって危ないだろ」

松田 「ほら、そこで大人しく食べるんだ」

雄大 「わかった、ケンタ」

松田 「それと、俺のことはおじさん、と呼ぶんだ」

雄大 「変だよ、ケンタはママの弟なのに」

松田 「何が変わなんだよ」

雄大 「おじさん、っていうのは、ただのおじさんで、ママの弟はケンタだよ」

松田 「そうだけどそうじゃなくて、えっと」

林 「先ず、炒飯食べるね。旨いよ」

雄大 「うん（食べる）旨ーい」

林 「松田君、この子と初対面？」

恵津子「兄弟仲、あまり良くないの？」

松田「最悪です。姉は母の前の夫の子で、

二十歳の時、家出して十六年間音信不通で、
お互い居場所も知らなかったのに――」

林「ネットで松田君を見つけたのか」

恵津子「手紙に事情も連絡先も書いてないし、

あの子、荷物もないんだよ。ひどい親だ」

松田「あの姉のやりそうなことですよ」

恵津子「子供、親御さんに頼めないの？」

松田「母が病死してすぐ、姉は父とぶつかり家出したんです。父は必死に行方を探し続けました。その父も六年前に。父は姉に殺されたんだ、と俺は思ってます」

林「（小声）あの子寝ちゃったよ」

松田「まったく、炒飯半分も残しやがって。すみません。あれは俺が払いますから」

恵津子「いいから。でも、母親がいなくてもよく話すし、懐っこいし。強い子だね」

松田「母親に似て面の皮が分厚いんですよ」

客が入店して、チャイムが鳴る。

恵津子「いらっしゃいませ」

林「奥へ運んで寝かせて。で、松田君は、この子預かるの？」

松田「無理です。俺、姉には一切関わりたくないんで、警察に行って相談します」

林「お母さん、迎えに来るといいね」

恵津子「お客さんだよ、酢豚定食、一丁」

林「はい、今行くよ」

松田「俺が行きます。もう上がって下さい」

林「いや、今日は帰っていいよ」

松田「店長、ぎっくり腰再発しますよ。いつも通り夜は休んでください」

林「ハオア、じゃ、子供は見てるよ」

続々とお客が入店する。

急に賑わう店内、食器の音

松田 M「夕飯のピークタイムのお客さんをさ

ばき、片付けや明日の仕込みを整えると夜の十時をかなり過ぎていた」

恵津子「ご苦労さん。あの子、お風呂に入ってたまた寝たわ。今、来るからね」

松田「今日のご迷惑をかけました。俺、これから警察に行ってきます」

恵津子「――松田君、警察行って大丈夫かね」

松田「え？」

恵津子「お父さんが風呂に入れたら、この子、あちこちに青あざがあるって。こんな遅い時間に親でもない男の人がそんな子供を連れて行ったら――」

松田「疑われて、俺が逮捕とか――」

恵津子「うちも客商売だから、面倒は、ね」

松田「――はい、わかっています」

恵津子「色々あると思うけど、行く前にさ、よく考えなさいね。ボク、おやすみ」

雄大「（眠い）バイバイ、おばあちゃん」

松田 M「俺は無言でお辞儀をし、子供を促し、夜の道を歩きだした」

風鈴の音がする。

松田 「おい、そのガラスの風鈴どうした」

雄大 「赤い風鈴、おじいちゃんの、ほうず

きの鉢にくつついてたの、もらった」

松田 「まさか、ねだってないだろうな」

雄大 「風鈴が好きなの、ってきくから、う

ん、って言ったらくれた」

松田 「（舌打ち）迷惑かけんなよ。俺が困

るんだ。お礼は言ったのか？」

雄大 「ありがとう、言ったよ」

松田 M 「迷いなくまっすぐ警察に向かう。子

供は大人しくついて来るだろうか」

歩くと風鈴が揺れる。

松田 「その音で、昔のことを思い出したよ」

雄大 「昔のこと？」

松田 「田舎にいた頃、軒下に吊るしてあつ

て、うちからいつも風鈴の音がしてた」

雄大 「風鈴鳴ってるところ、が、うちだね」

松田 「それで思い出した。お前のママさ、子供の時黙って一人で出かけて、夜まで遊んでいて迷子になったんだぜ」

雄大 「えー、ママ、どうしたの？」

松田 「風の強い日で風鈴の音がしていたから、うちに帰れたんだ。でも、心配した親が叱ったらさ、お前のママ、突然、思いつきり俺をひっぱたいて逃げやがった」

雄大 「ケンタ、痛いね」

松田 「理由なくぶたれると、特にな」

雄大 「あ、パトカーだ」

パトカーがサイレンを鳴らし、通り過ぎる。

松田 M 「急にピタリと足が止まる。目指す警

察はもうすぐそこだというのに」

雄大 「ぼく、今日どこへ行くの？」

松田 「今夜だけうちに泊めてやる。あそこ
のコンビニの上、3階だ」

雄大 「♪（可愛い即席の歌）ケンタのうち、
3階、1階はコンビニだ」

松田 M「子供が可愛いなどと思える気持ちが
一ミリも理解できない。姉と同じ真っ黒な
遺伝子が、俺の中にも半分あるからだ」

コンビニに入る。

雄大 「ケンタ、コンビニで何買うの」

松田 「朝飯のパンとビール三本」

雄大 「ケンタ、ビール三つも飲むの」

松田 「一本飲んで、残りは冷蔵庫。機嫌取
りにプリン買うか。プリンは――」

雄大 「（即答）プリン大、大、大好き。あ、
ぼく、ほら、五百円だけある」

松田 「俺が買うから、お前の金はしまえ」

雄大 「なんで飲まないビールも二つ買うの」

松田 「（面倒）好きなものを入れておくと、

冷蔵庫を開けた時、気分いいからだよ」

雄大 「へえ、そうなん？」

松田 「お前の言葉、面白いな。今までどこに住んでたんだ？ 博多の近くか？」

雄大 「――ママが誰にも言うな、って」

松田 「じゃ、聞かないよ。どうせ俺には関係ないし（会計する電子音）」

シャワーを浴び、水を止める。

しつこくインターフォンを鳴らし、ドアを猛烈に叩く音がする。

隣人 「（怒鳴り声）松田さん、松田さん！」

松田 「（ドアを開け）あ、お隣の――」

隣人 「（怒鳴る）松田さん、夜中に風鈴なんか外に出さないでよ。うるさくって全然眠れないんですけどっ」

松田 「風鈴？ そんなもの――。あ！」

ドスドスと部屋に入る。

松田 「（怒鳴る）お前、なにした？」

雄大 「ぼ、ぼく、してないよ」

窓を開ける。

風の音、風鈴の音が入ってくる。

松田 M 「風にあおられ、赤い風鈴がピンチハ
ンガーの中で激しく踊っている」

松田 「都会の風鈴は、外で鳴らしたらいい
ないんだっ」

乱暴に風鈴をむしり取る。

松田 「お前の口で隣のおばさんに、ごめん
なさいって謝れ——、おい、どうした？」

雄大 「（震える小さな声）ごめんなさい。
ぶたないで、ごめんなさい」

松田 M 「身をぎゅっと小さく丸め、頭を抱え
込み震えている。小さな手は白く、固くこ

わばっていた」

×

×

×

隣人 「気をつけて下さいよっ、ったく」

玄関のドアが閉まる

松田 「隣のおばさん、もう帰ったぞ」

雄大 「――ケンタ、ぶたないで」

松田 「こんなことで、ぶつかよ」

雄大 「絶対嘘な気がする」

松田 「（ため息）プリンでも食うか？」

雄大 「要らない。冷蔵庫に入れとく」

松田 「じゃ、もうその布団で寝な」

雄大 「ぼくのちりんとくん、は？」

松田 「ちりんとくん？」

雄大 「ぼくの風鈴の名前だよ。一緒じゃな

いと、ぼく絶対寝れない」

松田 「ったく。風鈴が壊れるから、このテ

イ
ッ
シュの空き箱にタオルを入れて、ほら、
そいつを寝かせて、近くに置きな」

雄大 「ちりんとくん、一緒だね（寝落ち）」

子供の深い寝息。

松田 「マジ？ もう寝たのかよ（ため息）」

目覚ましが鳴る。

松田 「おい、朝だぞ、起きろ」

松田 M 「布団を見た。子供はいなかった」

松田 「風鈴もないな、外に持って出たのか」

窓を開ける。

強い風が吹き込む。

松田 「今日も風が強いな。あの風鈴、外に出したままだったら、風で——」

（松田の想像）

風に卷かれ、激しく鳴り続ける風鈴。

風鈴にひびが入り、粉々に割れる。

松田 M 「突然、初めて会った時の雄大の顔が
胸にさしこんできた。あいつはあの時から
渦巻く風の中にいて、だから――」

松田 「探さないと。け、警察に電話、携帯、
携帯どこだ？」

家のものを激しくひっくり返す。

松田 「（雄叫び）何で無いんだよっ」

玄関ドアが開き、閉まる音

雄大 「トイレの紙やろ。ぼく、下のコンビ
ニで買ってきた」

松田 「（大声）（変な博多訛りで）な、なん
しよっと、雄大は。黙って出ていったら、

心配するだろうッ」

雄大 「（笑う）違うよ、『なんしょうと』や」

松田 「そ、そうか。目玉焼き食うか？」

雄大 「食う。あ、プリンも食べたい」

松田 「よし、手を洗って来い」

冷蔵庫を開ける

ちりと風鈴の音

松田 M 「風鈴が卵ラックに下がっていた」

松田 「何で冷蔵庫の中に――」

雄大 「あのね、ちりとくんも一緒に、そ

こにいていい？」

松田 「いいよ。なかなかいい場所だな」

松田 M 「風鈴はキンキンに冷えている。俺は、

そつと、卵を3個取り出した。ちりとく

んがクスッと笑うように、一度揺れた」

風鈴、かすかに鳴る。（終）